

特集 「2016年度人工知能学会全国大会 (第30回)」

## 特別セッション「JSTにおける先導的 AI 関連プロジェクトの紹介 —超スマート社会を牽引する CREST・さきがけ・RISTEX 新領域研究の挑戦—

オーガナイザ：山口 高平 (慶應義塾大学)

パネリスト：岩野 和生 (JST 研究開発戦略センター), 稲上 泰弘 (JST 戦略研究推進部),  
茅 明子 (JST 社会技術研究開発センター)

本セッションは、科学技術振興機構 (JST) における先導的 AI 関連プロジェクト「超スマート社会を牽引する CREST・さきがけ・RISTEX 新領域研究」の概要とその背景を紹介するものである。以下、セッションの概要について述べる。

最初に、栗原 潔氏 (文部科学省研究振興局) から、文部科学省と JST の関連など、文部科学省で推進する AI 関連プロジェクトの説明があった。

次に、岩野和生氏からは、知のコンピューティングという題目で、まず、CRDS (研究開発戦略センター) の役割は、科学技術戦略を文部科学省に提案することであり、AI に関連する CREST として、「人間と調和した創造的協働を実現する知的情報処理システムの構築」(研究総括：萩田紀博, 2014～21年) を発足させ、「情報・状況を把握する層」, 「ELSI を考慮した体験的知識・知恵層」, 「社会への影響を与える層 (助言・合意形成, 知価経済) の3層から、過去2年間に8チームを採択し、現在、最終年度の公募を行っているとのことである。また、次期 CREST として、「知の創造とアクチュエーション」WS が開催済みであり、知の創造を促進し、科学的発見や社会適用を加速する研究を考えていくということであった。さらに、新しいサービスプラットフォームとして、Cyber + Physical (REALITY1.0) = REALITY2.0 の概念が説明され、新しいサービス社会の到来、多様で最適なエコシステム、個人・集団・組織・国の競争原理が根本的に変化していく未来に対処すべきであることが指摘された。

稲上泰弘氏からは、まず、現在進行中の ICT 関連の CREST, さきがけについて説明され、次に、今年度発足予定の CREST, さきがけ, ACT-I について説明がなされた。文部科学省の AIP センターが理化学研究所に設置され、JST と連携して革新的人工知能技術を中核とした総合研究を展開していくことが決定され、CREST 新領域として「イノベーション創発に資する人工知能基盤技術の創出と統合化」(研究総括：栄藤 稔), さきがけ新領域として「新しい社会システムデザインに向けた情報基盤技術の創出」(研究総括：黒橋禎夫), 戦略的創造研究推進事業新規プログラム ACT-I (Advanced Information and Communication Technology for

Innovation) の新規領域「情報と未来」(研究総括：後藤真孝) が紹介された。特に、ACT-I は、独創的な若手研究者の「個の確立」を支援する、JST としては初めてのプログラムであり、大学院修士学生から応募可能という画期的な試みである。

茅 明子氏からは、RISTEX (社会技術研究開発センター) の公募である「人と情報のエコシステム」(領域総括：國領二郎) が説明された。エコシステムとは、生態系の有機的つながりを意味するエコにならって、人・モノ・組織が有機的に連携し、社会に広く共存共栄していく仕組みを意味するものであり、AI, ロボット, IoT, ビッグデータ, セキュリティなどの最新 IT を、人間や社会に真に貢献するものとするための研究開発領域である。

聴衆はおおよそ 100 名程度であった。講演終了後、4 種類の新公募 (CREST, さきがけ, ACT-I, RISTEX) について多くの質問が出され、聴衆の関心の高さが示された。ただ、若い研究者の参加が少なかったことが残念であった。JST とは、ファンディング (研究資金を提供する) 機関であることは周知のこととっていたが、大学院生を含む若い研究者は、知らない人が多く、本セッションは、JST で進行中の AI 研究の紹介だと勘違いしたらしい。「さあ、学生諸君！ 君達も JST ファンディングを獲得し、日本の AI をリードしようではないか！」のようなキャッチコピーが必要だったのかもしれない。また、公募終了後に、AI を研究している大学院生と話す機会があったが、ACT-I の新領域は全く知らなかったという声が聞かれた。彼らにとっては、メールや Web はすでに古いメディアであり、使うメディアはメッセージであり、Twitter, Facebook などのソーシャルメディアによる周知が必要のようである。今後、本学会全国大会では、ファンディングの紹介を続けていきたいと考えているが、このような視点にも注意していきたい。



図1 特別セッションの様子